「泥だんご作り」挑戦

辰巳 萌佑子
（石ころクラブ　泥だんご・くれよんグループ）

石ころクラブのなかで、それぞれがテーマを決めて取り組むことになったとき、メンバーの中から「泥だんご」の話が出た。

確かに、小学校の時（4・5年前）に遊びでよく作っていたが、光り輝く泥だんごなどを作っていたわけではない。また、以前テレビで、光り輝く泥だんごを研究している人とだんごを見たことがあり、確かに違うもののように光っていたが、本当に作ることができるのか半信半疑であった。そこで、メンバーから話が出たとき本格的ないわゆる光輝く『泥だんご』を作ってみたくなった。

工程といっても特別な作り方があるわけではない。土にまず水を混ぜ泥状にしたものを丸めて芯にしていった。土は学校の運動場の土がよいと良く言われているらしいが、とりあえず「人博」周辺の土を使った。後は、次ページに示した手順で作っていく。

最終的にツルツルピカピカの『泥だんご』を作ることが出来たが、特に以下の2点が今回成功したポイントではないかと思う。

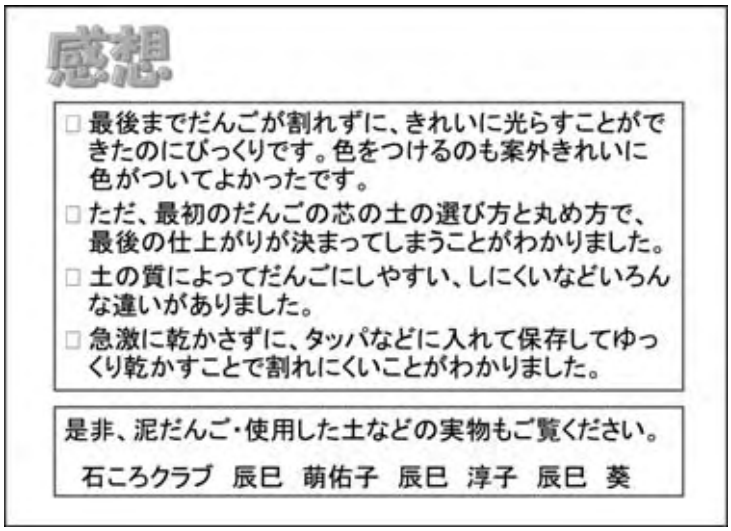
① 芯を作る工程で、土を何段階かのふるいにかけてきめをそろえたことである。こうすることで異型物もなく、うまく球体に固めることができたのではないかと思う。

② 製作は夏頃からはじめた。芯は泥をつけ乾かしての繰り返しで好みの大きさにしていくのであるが、この乾かす段階で屋外に放置しておくと今までは割れ目ができてうまくいかなかったが、今回は乾燥するのにタッパの中に入れっぱなしにしておいた。このことが、夏場の急激な乾燥を防ぎ芯まで徐々に乾燥していったので割れることなく球体が保たれたのではないかと思う。

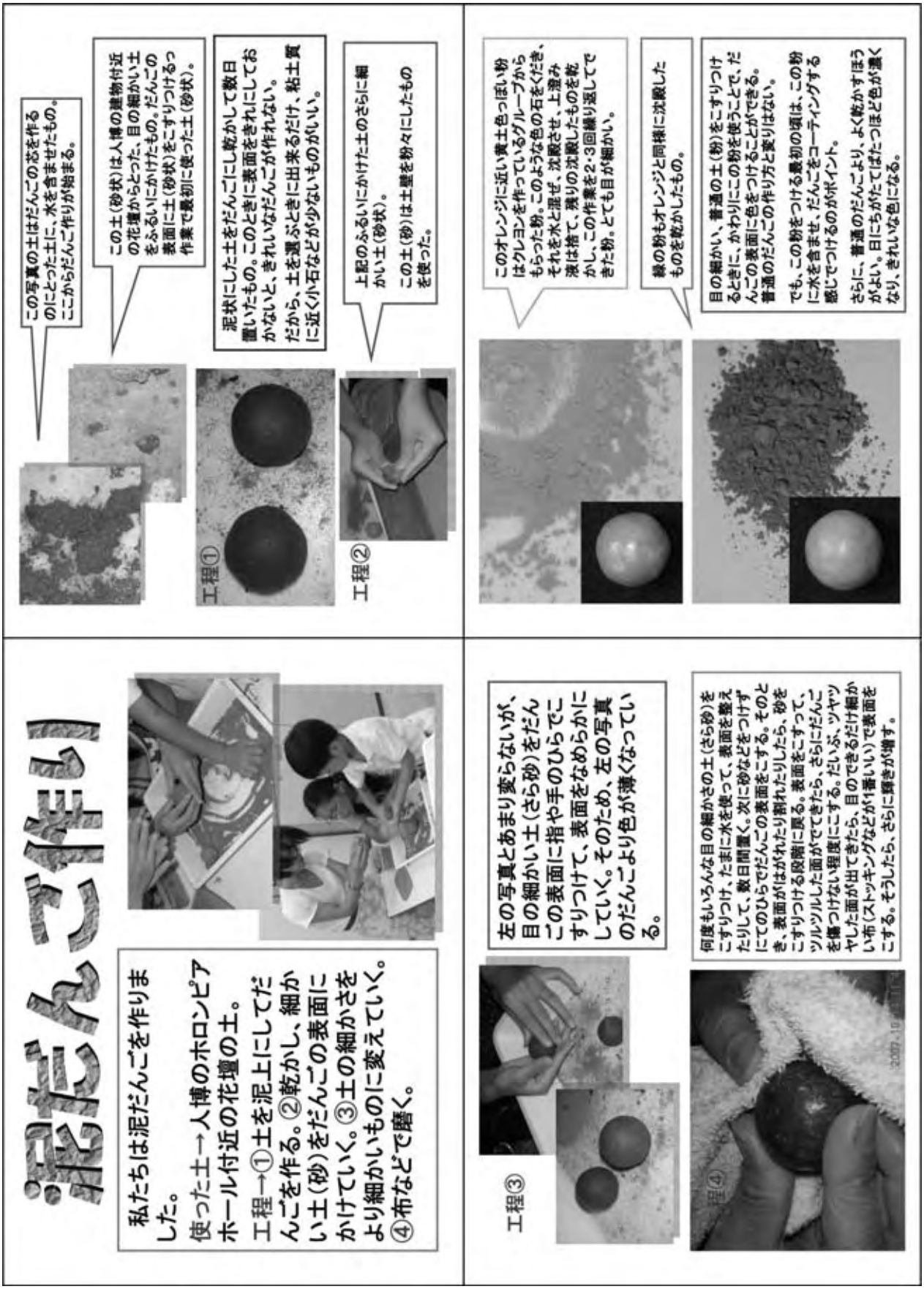
一つ、残念なことは、芯が出来上がった段階でもう少し表面を整えておけばよかった。ツルツルピカピカにするためには芯の表面のでこぼこを出来るだけなくすことで輝きがちがう。

ちなみに、完成した『泥だんご』は少々のことでは落としても割れないほど硬い。真ん中がどうなっているのか半分に割ってみたい気もする。

いままで、泥だんごは子供の遊びの一部としか考えていなかったが、今回作ってみてけっこう奥が深かった。今後いろいろな色の土で作ってみたいと思う。



共生のひろばポスター
発表でのまとめの文章


泥だんご作り
私たちは泥だんごを作りました。
使った土→人博のホロンピアホール付近の花壇の土。
工程→①土を泥上にしてだんごを作る。②乾かし、細かい土(砂)をだんごの表面にかけていく。③土の細かさをより細かいものに変えていく。④布などで磨く。
この写真の土はだんごの芯を作るのにとった土に、水を含ませたもの。ここからだんご作りが始まる。
この土(砂状)は人博の建物付近の花壇からとった、目の細かい土をふるいにかけたもの。だんごの表面に土(砂状)をこすりつけるっ作業で最初に使った土(砂状)。
泥状にした土をだんごにし乾かして数日置いたもの。このときに表面をきれにしておかないと、きれいなだんごが作れない。だから、土を選ぶときに出来るだけ、粘土質に近く小石などが少ないものがいい。
工程①
上記のふるいにかけた土のさらに細かい土(砂状)。
この土(砂)は土壁を粉々にしたものを使った。
工程②
このオレンジに近い黄土色っぽい粉はクレヨンを作っているグループからもらった粉。このような色の石をくだき、それを水と混ぜ、沈殿させ、上澄み液は捨て、残りの沈殿したものを乾かし、この作業を2・3回繰り返してできた粉。とても目が細かい。
緑の粉もオレンジと同様に沈殿したものを乾かしたもの。
目の細かい、普通の土(粉)をこすりつけるときに、かわりにこの粉を使うことで、だんごの表面に色をつけることができる。普通のだんごの作り方と変りはない。
でも、この粉をつける最初の頃は、この粉に水を含ませ、だんごをコーティングする感じでつけるのがポイント。
さらに、普通のだんごより、よく乾かすほうがよい。日にちがたてばたつほど色が濃くなり、きれいな色になる。
左の写真とあまり変らないが、目の細かい土(さら砂)をだんごの表面に指や手のひらでこすりつけて、表面をなめらかにしていく。そのため、左の写真のだんごより色が薄くなっている。
工程③
何度もいろんな目の細かさの土(さら砂)をこすりつけ、たまに水を使って、表面を整えたりして、数日間置く。次に砂などをつけずにてのひらでだんごの表面をこする。そのとき、表面がはがれたり割れたりしたら、砂をこすりつける段階に戻る。表面をこすって、ツルツルした面がでてきたら、さらにだんごを傷つけない程度にこする。だいぶ、ツヤツヤした面が出てきたら、目のできるだけ細かい布(ストッキングなどが1番いい)で表面をこする。そうしたら、さらに輝きが増す。
程④

泥ダンゴ作りの工程